

アンジェラ・マクロビー著／田中東子、河野真太郎訳（青土社、2022年）

## フェミニズムとレジリエンスの政治 ジェンダー、メディア、そして福祉の終焉

関根 麻里恵\*

「自己責任」という言葉が人口に膾炙するようになってかれこれ20年以上経とうとしている。まだネオリベラリズム（新自由主義）というものに馴染みがなかった筆者が、「自己責任」を強く意識するようになったのは大学生の頃であった。さまざまな局面で迫られる選択と、その選択が「正しかった」と認めてもらうための努力を怠らないことは「当たり前」だと思いこんでいた。また、他者から「自分が選択したことだから頑張らなきゃね」という「自己責任」を押し付けるような言葉をかけられることすらも「当たり前」だと思いこんでいた。それほどまでにネオリベラリズム的な道徳は日本においてもはびこっており、知らず知らずのうちに内面化していたことに気付かされる。

本書は、イギリスのカルチュラル・スタディーズを代表する研究者であるアンジェラ・マクロビーが2020年に刊行した *Feminism and the Politics of Resilience: Essays on Gender, Media and the End of Welfare* の翻訳書である。おそらく、フェミニズムやジェンダーの視点からメディア文化やネオリベラリズムについて研究をしている研究者からすれば、必ずといってよいほどマクロビーの名を目にしてきたことだろう。マクロビーが一躍有名になったのは、バーミンガム大学現代文化研究センター（CCCS）の大学院時代、ジェニー・ガーバーとともに男性の立場から男性を対象とした研究が主流であった当時のサブカルチャー分析を批判し、フェミニズムの立場から分析を試みた論文 *Girls and Subculture* (1978) などを執筆したことによる。しかし、本書の訳者あとがきにも記されているように、日本においてマクロビーの著書が邦訳されることは本書が刊行された2022年を待つまで一冊もなかった。その意味でもまさに待望の邦訳書である。

マクロビーは、「私たちの暮らすネオリベラリ

ズム時代に関連する現代的な「分断の実践」について、フェミニズムの視点から説明すること」(9頁)、すなわち、ネオリベラリズムのイデオロギーが蔓延する現代社会において、メディアとポピュラー文化を通してどのようにネオリベラリズム的な道徳が広まっているのか、そして、ネオリベラリズム的な道徳が形成される際、女性たちがどのような役割を割り当てられているのかについて分析を行なっている。こうした分析はマクロビーのこれまでの著書でも行われてきたが、本書では、①「左派の社会的課題と結びつけられ」(11頁) た新しいフェミニスト・キャンペーンと、②「女性の貧困が可視化されるようになった」(11頁) という二つの新しい要素を強調している。これらの要素を加えることによって、女性、仕事、福祉をめぐる女性らしさの支配的な理想——仕事においても、家庭生活においても、自己においても、身体においても成功すること——をポピュラー文化、(ソーシャル)メディア、国家が強化し、管理する方法(=「視覚メディアの統治性」)を説明することで、貧困や母性に対する人種差別的な汚名をいかに強めているかを示している。

本書の特徴として、「女性」を十把一絡げにして扱うのではなく、各階層における女性たちが置かれている状況を細かに分析していることが挙げられる。第1章「フェミニズム、家族、そして多重に媒介された新たな母性主義」では「トップ・ガール」および上位中産階級の女性たち、第2章「フェミニズムとレジリエンスの政治」では下位中産階級の女性たち、第3章「生活保護からの脱出——女性と「妊娠阻害雇用」<sup>コントラセプティブ・エンプロイメント</sup>」と第4章「「福祉国家の呪縛から脱却する」——ジェンダー、メディア、貧困の晒し上げ<sup>シェイミング</sup>」では労働者階級を含むマイノリティの女性たち、という具合だ。

特に興味深いのが、第2章において、ポピュ

\* 早稲田大学ほか非常勤講師

ラー文化における女性の役割や女性のエンパワメントが、誰によって、どのように表現されているのかを議論する際、相互に絡み合った3つの要素として〈p-i-r〉——〈完璧であること the perfect〉〈欠点もあること the imperfect〉〈レジリエンス resilience (回復力、粘り強さ)〉(74頁)——という「装置」と関連付けて分析しているが、第3章で〈p-i-r〉はポピュラー文化とメディアを介して特定の階層に対してではなく、あらゆる階層の女性たちに呼びかけをしているものの、その呼びかけに応じられない階層が存在していることを明示している点である。マクロビーは、「女性が〈p-i-r〉の呼びかけに応じる資格を得るためには、仕事をしているという最低限の地位を勝ち取らなければならない」(126頁)ことを指摘し、次のような女性たちは良くて排他的、最悪の場合、攻撃的・侮辱的に扱われるという。少々長くなるが、マクロビーが挙げる女性層をすべて引用したい。

物質的に恵まれないシングルマザーや黒人やエスニック・マイノリティの女性たち、ケアの義務がある女性たち、貧しい移民女性たち、失業率の高い地域に住む女性たち、国内の脱産業地域で暮らす女性たち、障害のある女性たち、そして労働者階級のうちでも下層階級の一部をなす女性たち、ワークフェアへと押し出される女性たち、そしてパートナーと不安定な関係にあり、支えてもらうことのできないごくふつうの女性たち、そして特に

そのような状況にある母親たちを含む、低い資格しかもたず、特別な技能を身に着けることのないまま恵まれない条件のもとに置かれた女性たち〔…〕。(125-126頁)

省略せずすべて引用したのは、もちろん、マクロビーが挙げた女性層だけがすべてではないが、少なくともこうした女性たちが「いる」ことを筆者も不可視化したくないという意図がある。一方で、第4章では、こうした女性たちを不名誉な形で可視化するメディア・コンテンツの登場——本書では「社会的おぞましアブジェクションさ」や「貧困の晒し上げ」という言葉を用いて分析されている——に言及し、いかに特定の女性たちへの偏った表現と、そのようなイメージから自分を切り離すことが禁じられているかを探っている。結論として、人口のなかで最も弱い立場にある人々は、自分たちのあずかり知らぬところでしばしばその社会的地位を維持するための資源として機能し、ポピュラー文化、特にメディアによって、「不平等社会」を維持するために利用されてしまっていることを指摘する。

マクロビーの研究はイギリスを中心としたものになっているため、どこまで日本の状況にあてはめることができるかは注意深く検討する必要があるが、本書はフェミニズム・メディア研究のみならず、現代政治やジェンダー問題に関心のある人たちにとって、極めて重要な一冊だといえよう。